

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 安田 真美

論 文 題 目

Dementia Care Mapping (DCM)を用いた

介護職員研修の効果の検討

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 梶田 悦子

名古屋大学教授 安藤 詳子

名古屋大学教授 榊原 久孝

論文審査の結果の要旨

世界的に認知症高齢者の増加が問題となっており、認知症患者の QOL 向上を目指した介護従事者の育成、そのための効果的な研修内容・方法の開発が求められている。認知症患者の QOL 測定では、患者自身の意識調査には限界があるため、認知症患者の行動観察を通じた客観的な QOL 評価法として Dementia Care Mapping (DCM) が考案されその有効性・妥当性が示されている。本研究では、その認知症患者の行動観察による DCM 評価結果を研修に取り入れ、介護職員が認知症患者と自らの介護内容との関連を具体的に事例検討する内容を含む介護研修プログラムを新たに考案し、認知症患者介護ケアの向上への効果について検討した。介護職員研修効果については、研修前後の認知症患者の状態を DCM 評価にて明らかにし、認知症患者の QOL 向上に効果があったかについて評価検討した。DCM の測定評価は、1 回目 (baseline)、再度介入前に 2 回目、職員研修実施後に 3 回目と、ほぼ 1 か月おきに計 3 回実施した。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 認知症患者の DCM 測定評価では、患者の QOL 指標となるグループ平均 WIB 値は、1 回目と 2 回目では有意な変化はなかったが、職員研修後の 3 回目に有意な上昇が認められた (1 回目と 3 回目 : $P=0.035$ 、2 回目と 3 回目 : $P<0.001$)。研修後には認知症患者の WIB 値は 50% 以上の患者で上昇がみられた (1 回目と 3 回目では 50% 上昇、2 回目と 3 回目では 57% 上昇)。本研究の介護職員研修プログラムは、認知症患者の QOL 向上に寄与する可能性が示された。
2. 行動カテゴリー別変化では、行動カテゴリー (A) 「他者との交流」の割合が 3 回目には 1 回目と比較して有意な上昇 ($P=0.041$) が認められた。行動カテゴリーと WIB 値変化との関連をみると、WIB 値が上昇した認知症患者群 (QOL 改善群) では行動カテゴリー (A) 「他者との交流」が 50% 以上で増加していたのに対し、WIB 値低下群 (QOL 低下群) では「他者との交流」が減少した割合が 60% を超えていた。本介護職員研修によって、認知症患者の「他者との交流」を促す関わりが増えたことが示唆された。
3. 本研究では、認知症患者の行動観察によって患者の QOL 評価を行う DCM を活用した介護職員研修プログラムを新たに考案し、その効果も研修前後の患者の DCM 測定評価で検討した点に新規性がみられる。DCM 結果に基づく事例検討などにより、介護職員が自らの介護内容と認知症患者との関連を具体的に見直す機会になり、「他者との交流」が増えるような介護内容の改善につながり、認知症患者の QOL 向上に寄与した可能性が考えられた。

本研究では、認知症患者の行動観察によって QOL 評価をおこなう DCM 評価結果を用いた事例検討を含む介護職員研修を実施し、本研究の DCM をベースとした介護職員研修は、認知症患者の QOL 向上に効果があることを示した。認知症患者の QOL 向上を目指した介護職員への効果的な研修内容・方法の開発が求められている中、本研究で示した研修プログラムの効果の検討は有意義な貢献につながると考えられる。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するために相応しい価値を有するものと評価した。